繪とすべきものは種々ある、何物か繪にならざらん、然しながら、それ等をたゞ描き出せばとてそれは眞正の繪といふことが出來ぬ、生命あり精神ある深い感情を現はしたものでなくてはならぬ。

「最後には新しい見方で歌へといふことである感情の極致は古今を通じてかはらない、さればたゞあたりまへにあらはしたならば誰が歌つてもかはりはないけれどもあたらしい見方で歌ふ時には絶えず人の感興を惹き起すやうになるのである」

眞正の繪に於ては其觀察が陳腐ではいけぬ、常人の注意を逸する點に大なる美を見出すことがある。要するに、眞正の繪は、自然の現象の外面的描寫ではなく、其感情を新しき見方により、深く具體的に、且僞らずして現はしたるものであるといふことに歸する。

如上の解釋には多少の異論もあらうが、兎に角此心をもつて繪に對すれば大なる間違はないことゝ思ふ。

水貼り（その一）

無性もの、不眞面目、寫生の失敗を苦にせぬ人、こんな側の方々は御勝手であるが、水彩畫を畫く紙は、一寸したスケツチにしても必ず畫板に水貼すべきものである。

畫用ピンで紙の四隅を留めて置たゞけでも畫が描けぬといふのではない、が、紙は水を含むと伸びるものであるから、畫面が不平等に脹れ上つて、乾き方も遲く、自然乾くのを待つために貴重な時間を空費する、時々刻々移りゆく景色に對して筆を走らす時の、一分なり二分なりの時間の如何に大切なるかを知るものは、寫生前の五分十分の水貼の時間を惜まぬ筈である。

水貼りをする時は、紙の兩面をよく濕す方がよい、水の中へすつかり漬けてもよい、海綿に水を充分含ませて、兩方をムラなく濕すのもよい、よく紙が伸びて柔らかになり、卷いても跳返らぬやうになつたら、水を切つて畫板の上へ正しく載せる、そして水分が多いと、緣貼の糊が利かぬから、乾いた布地か日本紙で緣だけ押へて水氣をとるとよい。